

## 安藝杏一先生を偲ぶ

鮫 島 茂

安藝杏一先生が去る8月22日到々おなくなりになりました、痛惜哀悼の念まことに禁じ難いものがあります。88歳の天寿であられたが、われらの象徴として百までも永生きて頂きたかったと惜まれる。

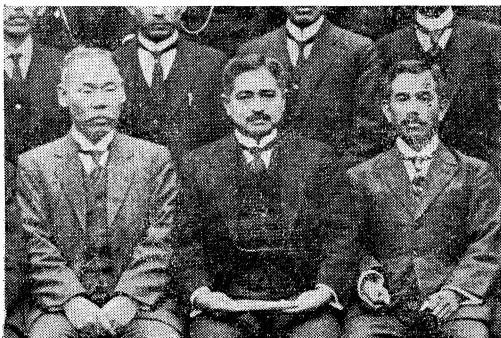
申す迄もなく先生は港湾工学界の泰斗、最長老の位置にあられ、その御履歴功績は本誌前号哀悼文にある通り、実にかがやかしいものがあります。即ち港湾発達の青少年期に当る、明治末期、大正期、昭和初期にわたり、広く活動せられた方でありまして、内務省系港湾の諸企画立案を永く担当せられ、その時代の港湾問題にはすべて必ず関与せられたと云って誤りでない。又自ら指揮せられたものとしては、若き日の新潟港、後年の横浜港震災復旧、横浜港の現存の大部分、清水港が代表的なものであるが、そのほか技術援助或いは判断をせられたものには、各重要港湾、地方団体企業の諸港から、満州支那大陸の港湾計画に及び、港の安藝さんの名は真に津々浦々とどろいた。

この時代はわが国が漸く港に目覚め始めた頃で、まだ数も少なく、専門家も寥々たるものであり、従って現在の港湾関係者の殆んどは、教えを乞ふた弟子か、孫弟子に当たる者で、まことに黎明期の大御所、実力者と申し上げてよいであろう。

先生は性篤実謹厳、純な技術家として終始せられた。多くの同輩の人の様に、事務や政治の分野に首を突つ込んで得々たるタイプではなく、黙々と技術を天職とせられる風であった。従って万事派手でなく、俗間の世評もあまり意に介せず、信念に進むという行かれ方であった。

私は港湾を志した関係で、古くから御警咳に接し、お教えを頂く間柄であったが、直接に先生の配下で御厄介になったのは、時が大正から昭和に移ると同時に、外国から戻って横浜港に任務を拜命した。あたかも震災復旧が一段落となり、新規の事業に乗り出す際で、岡部三郎君のあとをうけ、先生の指揮下に岸壁や防波堤を担当し

明治34年頃の安藝先生（向かって右）、左が  
中川吉造先生、中央は土木局長 堀田 貢氏



たが、爾来昭和4年御退官までこの関係が続いた。

先生は技術に信念を持たるるが故に、仲々やかましく熱心厳格であり、時に頑固でもあるが、旧来の方法手段に必ずしも墨守するといふのでなく、相当に進歩的な考えを持たれた。殊に下から持ってゆく新しい試みや考案に対しては、非常に喜ばれて仲々勇敢であり、決断も早く、反って鞭撻をうけて背水の陣を布いてやらざるを得なかった思い出もある。その頃横浜では独創的な仕事を次ぎ次ぎと始めたのであったが、技師、技手、工夫から労務者まで気心の合ったチームで、頗る仕事がやりよく、面白くこなせたのも、一つは主将たる先生の理解が深く、制約されることも無かったお蔭と、深い尊敬感謝の念を抱いている次第である。然し他面施工については厳格で、工事経済をやかましくいはれる事と、外部との接衝があまりお好きでない様で、その代理を仰せ付かる事が多くて困ったが、よい修業になったと心得ている。要するに、要領のみこめば仕え易い上司であられたと思う。

安藝先生は徳島の方、三高東大では柴田睦作先生、中川吉造先生と御一緒で、何れも恩恵を蒙りつた方々であるが、三人三様大分異なった御性格とお見受けをする。横浜市長であった有吉忠一さんも三高の同窓だそうだが、同氏から学生時代から純な真面目な方だったと伺った事がある。

先生の能書は有名である。初書きの教育勸語が名士の余技展に出て買い手がついた話もあるし、年賀状は御自筆で美事なものであり、毎年恐縮を例とする。酒も頗るお強いが、いくら飲んでも崩れられないので、メートル党の悪童共にはいささか苦手に属し、仲間に御加入を願えなかった。事程左様に風格を備えた謹厳居士であられるから、エピソードという様なものはさっぱり伝はらないし、私も思い当らない。唯一つ、或る宴席で芸者共に先生が、このごろ新聞に「ハネザエモン」々と盛んに書いているがあれは何者だと聞かれた。当時歌舞伎の市村羽左衛門が洋行する話題に疑問を持たれたわけだが、一同拍手感服したという話がある。後年に謡曲を始められ、老後は散歩と謡いが最上のお楽しみだったと伺う。

先生の御家庭は想像が出来る様に、まことに健全清潔そのものである。賢夫人の奥様との間に五男一女を持たれ、それぞれの方面に大成せられた。長男 皎一君のことは人の知る通り、今はお孫さんも立派な社会人で、曾孫さんもある。次男 貞一君は銀行方面に、五男 隆一君は小野田セメントで活躍してられる。唯お気の毒な事には戦争が御一家に大きな災をした。四男の方は大洋丸で殉職せられ、お女婿と三男の方は戦争の痛手で早逝されるし、お家は焼けて戦中戦後にかけて、あちこちと疎開転々とされた。

最近にはほとんど家に籠られ、旧交会にも久しくお顔を見なかったが、六月にお見舞に参った時、杖をついて客間まで出られてお目に掛ったのが最後となった。半歳ほどずっと寝込んで居られたと伺う。

謹みて先生の御冥福を祈り上げる（原文のまま登載）。

【筆者：正員 工博 日本港湾コンサルタントKK社長】